

農作物の撰擇
勸業部に一言

日 伯 新 聞

地租改正は
當然

州政府公表

租借問題再燃
マイリングー・サンントス線

賭博法案
州政府の妙案
由をぶらつく

和蘭領事昇任
勤続四十年で

とうふ
トウフ

蟻を撲滅せよ
Formicida "Jupiter" Elekeiroz

日本式うどん卸小賣

我那覇宗輔

東洋製麺所

リニス市リオ・ブランコ橋五番

郵局

一一〇三

送狀にようる
貢上珈琲の支拂は

荷主は番號を確めよ

新政黨
共和黨に對抗爲
ミナスに

相場と市況
為替
(五月廿六日)

和蘭領事昇任
勤續四十年で
和蘭領事としての職責を

州政府主催の品評會に於て最も有効にして取扱に便なる殺蟻劑は

化學製品工業會社
Sociedad de Productos Chimicos
SIA Cia de Productos Nippo-Brasileira
RUA DO COMMERCI N. 2
PINHEIROS - BUTANTAN - S. PAULO
TELEPHONE 7-5858

の二製品に限ることを認められました

◇ 写 国 近 信 ◇

相次いで暴露する

学生の赤化運動により

完全なる細胞組織により

統制ある潜行運動

教育委成の最高機關たる東京高師から左翼運動指導者四名、關係者數名がこのほど警視廳特高課に検挙された。學校當局も文部省も從來赤化運動の無風地帯と信じてゐただけに豫想外の極左分子出現を見て非常に周章し學校では首腦部協議の上校内一般學生並に外部に對する影響を考慮し表面「教育者として不適任」との理由で放校處分に付した。この外文部當局を極度に刺激してゐるのはさきに相つて起つた弘前高校、大阪高校、第一高校等の放校處分で、その表面的理由はまち／＼だが眞相はいづれも「ナップ」「全協」等に聯絡があり、マルキシズム、レーニズムの理論を實行に移さんと計畫を進めてゐたもので最近頻々として表面化された各デパート、陸軍兵器製造所、大日本人造肥料等の極左運動と同様完全な細胞組織によつて統制ある潜行運動が續けられてゐた。

新学期から斷然積極的に防止

文部省の対策決す

學園思想問題は例の京大事件を一時期として著しく潛行的侵しよくは急進度に擴大しきり、青年學生だけに、極左運動の激化を要慮して從來處分も出る限り寬大に取扱つて来たのが却て現在の如き重大な現象を招來したものと見られる節もある。同省の調査によると左翼運動の學生が昨年一年だけでも約二百名近く處分され、その一部は完全に潜行して在學當時の關係をとつて學園に手を延ばし就職不安に悩みつてゐる學生をせん動する傾向が判然と現れて來たので、當局でもそれらの學生部の施設に到着防衛に幻惑されなかつた彼女が果してある限りは、差當り新學期から二万九千圓の豫算をとり同部の陣容を盡へ積極的に赤化が却て現在の如き重大な現象を招來したものと見られる節もある。同省の調査によると左翼運動の學生が昨年一年だけでも約二百名近く處分され、その一部は完全に潜行して在學當時の關係をとつて學園に手を延ばし就職不安に悩みつてゐる學生をせん動する傾向が判然と現れて來たので、當局でもそれらの學生部の施設に到着防衛に幻惑されなかつた彼女が果してある限りは、差當り新學期から二万九千圓の豫算をとり同部の陣容を盡へ積極的に赤化

當局も激化を要慮し易行策強化して來たが感動し易い青年學生だけに、極左運動の激化を要慮して從來處分も出る限り寬大に取扱つて来たのが却て現在の如き重大な現象を招來したものと見られる節もある。同省の調査によると左翼運動の學生が昨年一年だけでも約二百名近く處分され、その一部は完全に潜行して在學當時の關係をとつて學園に手を延ばし就職不安に悩みつてゐる學生をせん動する傾向が判然と現れて來たので、當局でもそれらの學生部の施設に到着防衛に幻惑されなかつた彼女が果してある限りは、差當り新學期から二万九千圓の豫算をとり同部の陣容を盡へ積極的に赤化

現代化(中) 調

ガラスの時代

堂々世界第三位

光學ガラスも完成

ガラスの時代

ガラスの時代</p

其後に聴く

力ナリヤ島見た儘
旅先から 三浦鑿

ラス・バルマス?
つまらない處だ!
さう片付けてしまつては新聞
記者の冥利がつくる。そこで子細らしく引伸しまつては新聞
をつけてみる。一行か二行です
むところを、何回もの續き物に
しやうといふのだから随分タチ
が悪い。講釋師だつてこれほど
エゲツなほはなからう。先づ申
譯はこの位にしてをして、早速
本題にかゝらう。

「そもそも」ラス・バルマスとは
西班牙領カナリヤ群島の首府で
「と、このところ中學校教

師の口真似をさせて貰はん事に
はきり出しが悪い。北緯三十度
ふ島の北端にある小都會だ。地
圖で見ると丁度芋のやうな形を
かナリヤ(Gran Canaria)とい
アフリカ大陸から百海里ほど離
れてゐる群島、その中のグラン
カーナリヤ(Gran Canaria)とい
スに當るか、兎に角カナリヤ島
かなり大きい。

全島たつた二十万人しか住んで
ゐない。然もその中首府ラス・
バルマスに居るのが八万五千、
奥にはろくすつぽ人間が居ない
のだから開けてゐたさ加減がわ
かる。町の開基は千四百四十年
代だといふ。大昔はフェニキヤ
人も來たさうだしグリーク人、
ローマ人なども足を入れたとい
ふ。例の亞米利加義見でお馴染
みのコロンブスも

して最初のカベーラを建立した
といふから町そのものは古い。
古いが振はない。何しろ五
百年かゝつてやつと八、九万、
草が無い。一休こりやまと何と
いふところだ。されども足を立
る程わかつた。どの家も皆瓦無し
ルトシと同じだ。これぢや人間
はさてをいて獸でも棲めないと
いふ。カナリヤ島の本産地だけ
はさてをいて獸でも棲めないと
いふ。

ラス・バルマス? 無きに非ず。五百年前かゝつてもよいやうこしらへてある。目下

殖えない所は千年かゝつてもよ
く同じだ。其處には殖えないので
航する船は往復とも必ず此處で

炭水の供給を受ける事になつて
ゐる。其點では全く必要

所らしい。港の設備も主として
重油と石炭とを供給するに都合
無きに非ず。五百年前かゝつても
よいやうこしらへてある。目下

理由が嚴として存するのだ。北
アラジルが丁度それで

アマゾン地帶

が殊にそれなのだ。それを人間
さへ持つて行けば植民地が出来
るかのやうに妄想してゐる日本

政府と一部資本家の愚かさ加減
で何程か土砂がたまつてゐる。

それが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

しあつかしいのが缺點、主人
を歌ひだす

これが南亞、南米に對する中艦
港たるにある。而して此方面に

航する船は往復とも必ず此處で

黄いろき葉裏そよぎむらだつ
たはしきりゆ我が留守の間に

許總じて未だ現しきれず、
樹の廣葉かすめて燕飛びけり

あちこちにルリンニヤの聲きこ
えつゝ珈琲園の雨後の静けさ

「これ見よ」と泪黒子を示した
君にしれば我は忘れず

はれたし。

○ カンピヒ 德尾溪舟

明日は美しい夢のやうに
しあつかの生を憂ふ

NIPPAK SHIMBUN

Jornal Japonez de maior circulação no Brasil

Anno XVII

São Paulo — Quinta-feira, 28 de Maio de 1931

Num. 730

NIPPAK SHIMBUN

Director - Gerente:

ALFREDO TAKEUCHI

Redação da pagina brasiliera José Soáte

Redação, Administração e Oficinas
Rua de Liberdade, 146
Caixa Postal, 375
Telephone, 2-3926
Endereço Telegráfico "NIPPAK"
SÃO PAULO - BRASIL

ASSINATURAS

Para o Brasil:

Por anno	30\$000
Por semestre	16\$000
Número aviso	5\$00
Para o Exterior:	

Por anno 60\$000

ANNUNCIOS

Temos à disposição dos interessados
uma fábrica completa de preços para an-
nuncios restalhos. Telephone 2-3926

Café e Algodão do Brasil

A possibilidade de exporta-los
para o Japão

Encontra-se em São Paulo, m. Cambe, representante da importante firma nipponica Mitsue, fazendo estudos especiais sobre a possibilidade de escamínhar para o Japão o café e o algodão brasileiros. Com esse objectivo o referido delegado entrou em entendimento com o Instituto de Café e varias firmas exportadoras desta capital.

Tanto mais oportunidade e benefício é essa actuação quando é certo que estamos em começo de safra cafeeira, na perspectiva, portanto de vultosos negócios.

E mais uma grande iniciativa do povo japonês que bem demonstra, pelo seu esforço, a firme vontade dos nipponicos em co-operarem pelo engrandecimento da terra que os recebe carinhosamente.

DR. S. TAKAOKA

MÉDICO OPERADOR

Rua Fogudes, 6
Tel. 7-4683

S. PAULO

A Imprensa Japoneza

A opulencia da imprensa no Imperio Japonez
Uma guerra entre jornais

(Conclusão)

Os principais anunciantes nos diários nipponicos são os editores e os livreiros. A primeira pagina do "Tokio Nichi-Nichi" é ocupada inteiramente com o reclame de livros novos. Por aí se poderá ter uma idéa do movimento intelectual do Japão. Em segundo lugar, na lista de publicidade, figuram os farmacêuticos, vindos em seguida os vendedores de artigos de moda e os fabricantes de produtos de toilette.

Evolução do Jornalismo

Por muito tempo a condição do jornalista não era lá muito invejável na terra do Mikado. Pela mesquinha das ordenadas e pela falta de importância que lhes era atribuída, a existência dos jornalistas era das mais precárias. O pae de qualquer mocinha casadoura acreditaria faltar ao seu dever concedendo a mão da sua filha a um homem cuja profissão consistia em escrever para a imprensa. Com o aparecimento dos grandes diários, porém, a situação sofreu uma radical transformação. O director de um jornal de primeira ordem ganha o triplo de que um ministro de estado e o quintuplo de um governador de província.

Hoje as mocinhas casadouras lançam-se à caça dos jornalistas, achando-os ótimos partidos.

E' útil lembrar que não só se modificou a situação económica e comercial dos jornalistas. Também a estrutura dos jornais passou importantes transformações.

Se o Japão goza hoje de uma opinião pública consciente, que é verdadeiramente digna desse nome, muito se deve à ação da imprensa. A luta contra o governo autocrático, contra as facções militares e navais, a campanha pela occidentalização do paiz, etc., não poderiam ir para adentro se não contassem com o apoio forte, resoluto, intenso, dos jornais que, em Osaka e Tokio, começavam a dominar as correntes de opinião.

E hoje, no Japão floriente e moderno, é a imprensa a mais alta e nítida expressão do seu progresso.

(*) N. R. — Chamamos atenção ao articulista, sobre o que se refere às máquinas de escrever e à typographia japoneza. Sobre esses dois assuntos não se acha bem informado o redactor do artigo que acabamos de transcrever, pois existem no Japão, e aqui mesmo no Brasil, máquinas de escrever o idioma japonês, bem assim, como também possuem, os nipponicos, aperfeiçoadas máquinas de compôr, muito parecidas com as "Monotypes", e achar-se-muito adequadíssimas nas artes gráficas, como é fácil verificar pelas magníficas revistas impressas em rotogravura, offset, trichromia, etc. Desculpemos, o autor desse interessante artigo, o "asterístico".

Notícias e telegrammas do Japão

(Serviço especial do NIPPAK SHIMBUN e dos Jornaes)

Para restabelecer o valor da prata

○ Japão pretende convocar uma conferencia

E' intenso o interesse manifestado em Washington pelo telegramma de Tokio, divulgado pelo "New York Times", dizendo que altas autoridades do Tesouro japonês são favoráveis à convocação pelo Japão da projectada Conferencia Internacional para a Restauração do Valor da Prata.

Dizia-se anteriormente que o Japão poderia convocar a Conferencia, mas as autoridades do Tesouro, reflectindo a maneira de ver de alguns banqueiros japoneses, eram contrários à idéa.

Acredita-se que o Japão convocará a Conferencia depois de sondar varias potencias interessadas. A principal preocupação está na possibilidade de outros governos se anteciparem ao do Japão, pois já se fala que o da China tem o propósito de convocar tal conferencia. O que é evidente é que os Estados Unidos preferem seja ella convocada pelo Japão, contentando-se o governo de Nankin em participar dos trabalhos, uma vez que se acredita também que a China não os hostilizará, pelo menos.

As economias militares adoptadas pelo Parlamento

Tokio, 18 — O programma da redução das despesas militares, adoptado pelo Parlamento, comprehende a supressão de tres divisões do exercito e fusão de varias escolas militares.

A redução da esquadra e fuzileiros navais só será decidida em outra reunião do Parlamento, em vista de ter de seguir o pacto assignado em Londres.

Grande concurso organizado pelo "Asahi Shimbun"

100.000 yens de premio ao piloto japonês, ou 50.000 ao de qualquer nacionalidade que realizar essa proesa

As bases do concurso

Conquistar o céo desconhecido é o desejo e a ancia dos aviadores; os polos Norte e Sul já reflectem em seus gelos, veloces avibes, a travessia aerea pelo oceano Atlântico, feita pelo destemido Lindberg, asombrou o mundo todo, e, agora, a travessia directa do oceano Pacífico, é o sonho dos aviadores mundiaes.

Desde 1927 os projectos anunciados passam de 40, entre os quais o de Work que, partindo de Tacoma, goroa em Vancouver, e o de tenente Bromley que voou até Chichima, e, actualmente, ha os projectos de Gebel-Kodama, Kingsford Smith, Ash e Codox, e deante de todos esses projectos e tentativas, o céo do Pacifico continua impenetravel, como era o Atlântico antes de rasgal-o as heroicas azas pilotadas por Lindberg.

O "Asahi Shimbun", que sempre

tem cooperado pelo melhoramento

da aviação civil, acaba de apoiar

a tentativa da travessia aerea do

Pacífico, oferecendo os vultosos

premio que mencionamos abaixo,

afim de instigar os aviadores munidias a acelerarem o gigantesco

passo Japão-Norte America, um

dos maiores projectos humanos,

que, uma vez realizado, muito contribuirá para desenvolver o pro-

gresso da aviação.

PREMIO — 100.000 yens (750 contos de réis), que serão pagos ao primeiro aviador japonês que fizer com exito a travessia, e sendo o aviador de qualquer outra nacionalidade, ainda que acompanhado por japones, o premio será de 50.000 yens (375 contos de réis).

REGULAMENTO GERAL

I. O vôo deve ser feito em aeronave. — II. A travessia deve ser feita directamente, isto é, sem escalas. — III. O apparelho empregado pode ser de qualquer marca ou tipo, sendo porém obrigado a ter instalação de radiotelephonía. — IV. O aviador pode ser de qualques nacionalidade. — V. Não ha limite quanto ao numero de tripulantes. — VI. O ponto de partida pode ser dos dois extremos, sendo que, partindo do Japão, será obrigado a chegar ao sul de Vancouver, e se levantar vôo em Norte America, e deverá descer em Honshu. VII. O reabastecimento de gazolina, etc., deve ser feito no ar. — VIII. O premio só será outorgado ao conquistador quando o vôo for controlado pela Comissão examinadora. — IX. O prazo do concurso é de 1 anno, a contar de 20 de abril do corrente.

Folhinhas para 1932

Finissimos chromos japonezes
Variado e escolhido sortimento para todos os ramos commerciaes, encontra-se na

TYP. "NIPPAK"

Rua da Liberdade, 146 - Caixa 375 - SÃO PAULO

A travessia do Pacifico

Tokio, 20 — Thomas Ash Jr., o jovem aviador da linha Seattle-Washington annuciou a sua intenção de efectuar em 30 de maio proximo, um vôo sem escalas, através do Oceano Pacifico, partindo de Sabishire. O destimido aviador tenciona voar no aeronave em que o tenente Harold Bromley fracassou na mesma tentativa.

Fracasso da aviadora Schultes

Fracassou no seu inicio a tentativa da aviadora alemã Schultes, de alcançar Tokio em avião, em tempo minimo, passando por Budapest, Sophia, Constantinopla, Carake, Calcutta e uma ou duas cidades da China.

A aviadora e seu piloto Sackmann sofreram um desastre em Schalling, na Baviera, ficando ambos bastante feridos.

A intenção dos aviadores era de prosseguir de Tokio até a costa norte-americana.

Cruzadores japonezes em visita a Marselha

Chegaram ao porto de Marselha, procedentes de Toulon, os cruzadores japonezes "Izumo" e "Yakumo" que ha pouco tempo estiveram em visita à Itália.

Os cadetes nipponicos que viajam a bordo dos dois vasos de guerra em viagem de instrução, visitarão também Pariz.

Fabrica de polvora destruída

Yokohama, 23 — Numa fabrica de munições local ocorreu tremenda explosão de polvora que provocou incêndio no predio e em varias habitações próximas. O numero de victimas era de 1 morto e de cerca de 50 feridos. Os bombeiros continuaram a desenvolver esforços para dominar as chamas que se alastravam cada vez mais.

Naufragio de uma Chalupa

Tokio, 24 — Uma chalupa de pescadores sossobrou ao largo de Yokohama, em virtude de forte tempestade reinante.

Um navio conseguiu, a muito custo, recolher das ondas 8 dos naufragos, não havendo notícia de 23 outros, que se acredita tenham perecido afogados.

Congresso algodoeiro

Foi convocado pelo prefeito de Tatuhy, para Junho proximo um Congresso Algodoeiro. O secretario da Agricultura de São Paulo, acudindo ao appello dos promotores desse certamen regional declarou estar prompto a patrocinar a iniciativa, tendo já posto á disposição dos organizadores do Congresso, tecnicos e especialistas no assumpto, pertencentes ao seu departamento.

Serão convidados outros tecnicos, além dos officiaes. O objectivo do Congresso é venir, discutir e resolver questões relacionadas com a intensificação da cultura e melhoramento das qualidades de algodão, cultivados na zona; processos desejaveis de cultura; melhoramento da fibra; regulamentar a distribuição de sementes; melhorar o sistema comercial e o beneficiamento do produto; intensificar a cultura das plantas texis nativas na região.

NOTAS AGRICOLAS

A SOJA

Foi optima a impressão que causou aos visitantes a Exposição agrícola inter-municipal, realizada no corrente mez, pela "Cotia Seinen Kai". O que mais foi admirado foi as amostras do feijão Soja que, como se sabe, é uma fonte de renda magnifica para os agricultores e de optima utilidade para o consumidor.

Para demonstrar a importancia dessas leguminosas da sub-familia das Papilionaceas, do genero Glycine L., basta citar que boa parte das populações da China, Mandchuria, Coréa, Japão, Formosa e outros países asiáticos, tem como principal alimentação certas espécies de sojas descendentes da "Soja hispida" Moench ou "Glycine hispida" Maxim.

Na China cultivam geralmente tres variedades principaes de "teou" (soja), a "houang" (amarilla), a "ts'-in" (verde) e a "hei" (preta).

Essas variedades têm um ciclo de 8 a 12 meses crescendo até um metro. As hastes, folhas e vagens são pilosas, as flores quasi sem cabo, em cachos, são de cor violeta-clara.

As vagens têm depressão marcando as sementes, contendo cada uma duas a cinco.

São plantas de facil acclimatação, pouco exigentes quanto às terras, resistentes ás secas.

São refractarias a molestias causadas por fungos e certas variedades como a "Glycine hispida Sieb. e Zucc." de enorme produção.

Como todas as leguminosas, azotam a terra.

Não se dão bem em terrenos humidos e nos humosos, vegetando exuberantemente nos que contiveram certa porcentagem phosphoro e cal.

As sementes dessas tres espécies são de cores lisas com os olhos bem marcados.

Contém em numeros redondos cerca de 12 % de humidade, 32 % de matéria azotada, 14 % de matéria gordurosa, 32 % de matéria não azotada, 5 % de fibras e 5 % de cinzas.

Em comparação com as outras leguminosas são alimento muito mais substancial.

Por conterem muito oleo e ser muito bom o gosto dos alimentos preparados com sojas, como o "Miso", que é arroz e soja cozinhados á parte e depois misturados e temperados e uma espécie de sopa "falu", como a nossa sopa de feijão ou de ervilhas.

Soccada no pilão forma uma pasta que é usada com ou sem sal como manteiga.

Até na Europa já chega o molho picante "Soy" ou "Shoya", para peixe e assados muito usado na China, no Japão e no Indostão.

O oleo de soja, cuja fabricação é uma colossal industria agrícola na China, Mandchuria e outros países, é extraido principalmente da "Soja Hispida" Sieb. e Zucc.

O oleo é empregado na alimentação e na iluminação caseira.

A fabricação é muito rudimentar, consistindo em deixar as sementes de molho durante 10 a 20 horas para depois moer as com certa quantidade de agua, fazendo fervor essa massa mole para arrebentar as celulas que contém o oleo.

Finalmente exprime-se a massa de modo primitivo, reduzindo-a a tortas quasi secas, as quais em certas zonas são o principal alimento das populações pobres. Chamam-se em chinês "teou fou".

Além do oleo fabrica-se o queijo vegetal.